

私たちは「怒り」や「憤り」の気持ちに振り回されて大きな過ちを犯すことがあります。それは「怒る者は争いを引き起こす。憤る者は多くの背きがある」(箴言 29:22)と記されている通りです。

しかし神は憤りを発せられる方です。そして、「神のかたち」に創造されている者は、この世の悪に対して怒るべきときがあります。しかし、私たちの怒りや憤りは、不安や愚かなプライドから生まれてはいないでしょうか。

エステル記に描かれる王もハマンもすぐに憤りに満たされてしまう人々でしたがモルデカイもエステルも、「怒る」のではなく「嘆いて」います。怒りの第一次感情の核心には「不安」があると言われますが、二人は不安を嘆きと祈りに変えました。そして、神はそれに答えてくださいました。

パウロは、「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する人たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい」(ローマ 12:18,19)と記していますが、モルデカイもエステルもハマンに力で対抗しようとする代わりに、嘆いて祈りながら、「神の怒りにゆだねた」と言えましょう。

### 1. 「私にいのちを与え…私の民族にもいのちを与えてください」

多くの人々は、ユダヤ人モルデカイが、なぜ王命に逆らってまで、アガグ人ハマンに対し、「膝もかがめず、ひれ伏そうともしなかった」(3:2)のかを不思議に思います。しかしそれによってハマンが「モルデカイに対する憤りに満たされた」ことが二度に渡って明確に記されます(3:5, 5:9)。

一回目の直後にハマンは、ユダヤ人絶滅計画を立て、その実行日が「くじ(プル)」で決められ(3:7)、どの民族を滅ぼすかについては王に伏せられたまま、王の書簡がペルシア帝国全土に送られました(3:13)。

二回目の直後に、ハマンは高さ50キュビト(約23m)の柱を立てさせ、王の許可を得てモルデカイをそこに吊るすことに決めました。ところが「その夜」、ペルシア王は「眠れなかった」中で(6:1)、ユダヤ人モルデカイに、王殺害のクーデターを未然に防いだという功績があることが発見されます。

その後、王はハマンに「王が榮譽を与えたいと思う者には、どうしたらよからう」(6:6)と尋ねます。ハマンはてっきりそれは自分のことと思って、その人に王服を着させ、王の馬に乗させ、その上で、王の首長の一人に馬を引かせて町の広場の人々の前でその人の功績をたたえさせるようにと進言しました。王はそのときハマンの野心に気づいたことでしょう。

その結果は、何と、ハマンがモルデカイを載せた馬を引いて、人々の前でモルデカイの功績をたたえるという逆転に至りました。そしてそれを聞いたハマンの妻は、彼がモルデカイに負けてしまうことを予告しました。

その直後に開かれた二回目の宴会の様子が、「王とハマンは王妃エステルの宴会にやって来た」(7:1)と描かれます。エステルは前日に、命がけで王の前に出てゆきました。それはユダヤ人絶滅計画を思いとどまってもらうためでしたが、彼女はそのときも、またその後の宴会でも、自分の願いを王に申し出はしませんでした。

そのような中で、「この酒宴の二日目にも、王はエステルに」、「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう」と尋ねたと

記されます(7:2)。王がこの表現を使うのは三度目です。

これは当時の王が自分の権威を示す常套句かもしれませんが、エステルは、王が三度にもわたって自分の寛容さを紹介せざるを得ない状況を作ったとも言えます。簡単に願いを言わなかったことで、王の方が、エステルの願いが何なのか聞きたくてたまらなくなっています。まるで王の心はエステルの手の内で動かされているかのようです。

そこで「王妃エステルは」ついに自分の願いを表現し、「王様。もしも私があなたの目にご好意を受け、また、もしも王様に善いことであれば、私にお与えください、私の願いを聞き入れて私にいのちを、私の望みを聞き入れて私の民にも(いのちを)」と言いました(7:3)。

彼女は、「もしも」と繰り返し、自分が王の目に好意を得、王に「善い」ことという前提で、「私の願い」として「私にいのちを」、また「私の望み」として「私の民族にも(いのちを)」、「与えてください」と謙遜に述べます。

さらにそのように願う理由を「私たちは売られています、私も私の民族も、それは根絶やしにされ、虐殺され、滅ぼされるためです」(7:4)と述べます。

王はこのことばを、身を乗り出すように聞いたのではないのでしょうか。自分の知らないところで、エステルの民族が、取引の材料にされ、滅ぼされようとされるというのですから…。これは、かつてハマンが銀一万タラント(当時の王家の年収の三分の二)もの金額を国庫に納めて一つの民族を根絶やしにするとしたことを思い起こさせたことでしょう(3:9)。

そればかりか、エステルは「私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたでしょうが、そうはいきません。その迫害する者は王のお受けになる損失を償うことはできないのです」(7:4)と付け加えました。最後の文章は、「私たちの苦しみは王の損失に比べたら取るに足りませんから」と訳すことができます。

彼女は王の同情を引き寄せるような表現でことばを始めながら、最後には、王の立場を自分は何よりも気にしていると付け加えました。彼女は、ハマンのユダヤ人絶滅計画は、ただでさえギリシャとの戦争に負けて困難に陥っている王家を、さらに困難に追い込むことになると言外に言ったのではないのでしょうか。

王はエステルのことを大切に思っていましたから、彼女とその民を失うことが自分にとっても、とてつもない損失になるということが、すぐに理解できたことでしょう。

エステルは、決して、自分に対する王の愛情を確かめるような表現は使っていません。ただ、自分の切実な願いを、驚くほど控えめに、しかも、王の心や王の置かれている状況に寄り添うようにして表現したのです。

それに対し「クセルクセス王は王妃エステルに、「いったいそれはだれか。どこにいるのか、そんなことをしようと心に企んでいる者は」と言いました(7:5)。ここでは「だれか」「どこか」という問いが強調されます。

その問いに、彼女は驚くほど簡潔に、「迫害する者、その敵は、この悪人(忌まわしい)ハマンです」と答えました(7:6)。

私たちの常識からすれば、エステルはもっと慎重に、ハマンの悪事を証明する必要があるように思い

ます。しかし彼女は、本題に入るまでに十分すぎるほどの時間を取りながら、王が身を乗り出して、「だれか」「どこか」という質問をしたくなるように仕向け、最後は有無を言わずにハマンを追い込むような会話へと持って行きました。

それは人が基本的に、論理よりも感情で動くのを知っているからです。

その結果が、「ハマンは王と王妃の前で震え上がった」と描かれます。彼はエステル話を聞きながら、自分のユダヤ人絶滅計画が問題にされていることに驚きを感じ、何らかの弁明のことばを述べたいと思っていたかもしれません。しかし、エステルと王のあまりにも簡潔な会話の前で、すべての弁明の機会を失ってしまいました。

その後の展開が、「王は憤って酒宴の席を立ち、宮殿の園に出て行った。ハマンは王妃エステルにいのち請いをしようとしてとどまった。王が彼にわざわい(悪)を下す決心をしたのがわかったからである」(7:7)と記されます。

王はここで一瞬のうちに、それまでのハマンとの会話を思い起こし、彼の狡猾さと残虐さ、また、王と同じ栄誉を求めるような彼の危険な野心に思いが至ったことでしょう。

そして、「王が宮殿の園から酒宴の広間に戻って来ると、エステルがいた長椅子の上にハマンがひれ伏していたので」、王は、「私の前で、この家の中で、王妃までも辱めようとするのか」と言ったというのです(7:8)。

これはハマンがエステルにすぎるために、彼女が座っていた長椅子に手をかけていたという程度のことかもしれませんが、憤っていた王には、ハマンが乱暴をしようとしているように見えたという意味だと思われます。

そして、「このことばが王の口から出るやいなや、彼らはハマンの顔を覆った」と記されています(新改訳2017では「ハマンの顔は青ざめた」)。これは当時の犯罪人が捕えられるときに頭に袋をかぶされることを指します。ハマンは総理大臣の地位から一転して王家への反逆者として捕えられたのです。

しかも、「そのとき、王の前にいた宦官の一人ハルボナが」、「ちょうど、王に良い知らせを告げたモルデカイのためにハマンが用意した高さ五十キュビトの柱がハマンの家に立っています」と言いました。

それに対し、王は即座に、「彼をそれにつけよ」と命じました。そして、その結末が、「こうしてハマンは、モルデカイのために準備しておいた柱にかけられた。それで王の憤りはおさまった」(7:10)と記されます。

ハマンが「憤りに満たされ」、ユダヤ人絶滅計画を立て、モルデカイを木にかけて殺そうとしたことが、結果的に、王の「憤り」を買うことにつながり、ハマンは自分が用意した木にかけられて殺されました。

まさに「穴を掘る者は、自分がその穴に陥り、石を転がす者は、自分の上にそれを転がす」(箴言26:27)と記されている通りです。また、日本語のことわざの「策を弄して墓穴を掘る」に相当すると言えましょう。

## 2. 「王はハマンから取り返した自分の指輪を外して、それをモルデカイに与え」

8章の初めには、「その日、クセルクセス王は王妃エステルに、ユダヤ人を迫害する者ハマンの家を与えた。モルデカイは王の前に来た。エステルが自分と彼との関係を明かしたからである。王はハマンか

ら取り返した自分の指輪を外して、それをモルデカイに与え、エステルはモルデカイにハマンの家の管理を任せた」と簡潔に描かれますが、これはまさに天地が引っくり返るようなできごとです。

つい一日前まではペルシア全土のユダヤ人もモルデカイも死に定められているように見えました。ところが今、モルデカイはハマんに代わって、法令を發布する王の指輪をあずかる総理大臣の立場に上げられたのです。

これまでの物語の展開の鍵は、「**憤り**」にありました。エステルが宮殿に召されるようになったきっかけは、王が、前王妃ワシュティが「**王の命令を拒み、来ようとはしなかった**」ことに、「**激しく怒り、その憤りが彼のうちで燃え立った**」(1:12)ことから始まっていました。

ユダヤ人絶滅計画は、ハマンがモルデカイの不遜な態度に「**憤った**」ことから立てられました。そしてハマンの滅亡は王の「**憤り**」によって決まりました。

一方、モルデカイやエステルには、「**憤った**」という表現がありません。彼らは当然ハマンに対して憤ったはずですが、ここに記されているのは、彼らを初めとするユダヤ人すべてが嘆き叫びながら断食をしたということです(4:3,16)。

エステル記には敢えて、神の名が省かれています。彼らがハマンに対して憤りの気持ちを顕にする代わりに、すべてを支配する神に向かって「泣き叫んだ」ということは明らかです。

このすべての背後で、神はご自身を隠しながら、エステルを王妃の立場へと導き、クーデター計画をモルデカイに気づかせ、時間が経過してから、王を不眠にしてモルデカイの功績に気づかせ、ハマンが高慢になるのにまかせて自滅への道を開いて行かれました。

モルデカイもエステルも、ハマンに対する復讐心に駆られて行動したのではなく、神のさばき、また神が立てた王のさばきに信頼しようとしていました。

ハマンは最後まで、エステルが自分を「**その敵は、この悪人(忌まわしい)ハマンです**」などと呼ぶとは思いませんでした。ハマンは自分が王妃からも高く評価されていると思込んでいたのです。

彼女はもちろんハマンを心から憎んでいたはずですが、しかし憤りと憎しみの心を神に訴えることによって、極めて冷静な行動を取ることができました。

また、モルデカイも決して、ハマンに対して卑屈になることも、怒りを顕にすることもありませんでした。ハマンがしぶしぶ、モルデカイを王の馬に乗せて人々の前で彼の功績をたたえざるを得なかったときにも、モルデカイは決して嫌味の一言も言わなかったことでしょう。

モルデカイもエステルも、神にはすべてを逆転させる力があることを信じて、憤りに身を任せはしませんでした。

しかも彼らは、神がすべてを支配しておられるなら、自分たちは何もしなくても良いはずだなどとは決して思っていない。エステル願いでペルシアの首都に住むユダヤ人は三日三晩の断食をしました。エステルはそのとき死を覚悟しました。そして、三日目に王の前に決死の覚悟で出たときから、すべての歯車の動きが変わったかのようです。

これはイエスが十字架で死んだ後、三日目によみがえったことを示唆するできごとです。イエスは三日

間、墓の中で死んでいたことで、新しいいのちに移りました。

### 3. 「王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができない」

エステルは、モルデカイが総理大臣の地位に抜擢されたことに満足することなく、ユダヤ人絶滅計画自体を無効にするために、初めて具体的な提案を「泣きながら嘆願」しました(8:3)。それは、「アガグ人ハメダタの子ハマング、王のすべての州にいるユダヤ人を滅ぼしてしまえと書いた、あのたくらみの書簡を取り消すように、詔書を出してください」というものでした(8:5)。

しかし、一度出された王命を取り消すことはできません。それで王は、「王妃エステルとユダヤ人モルデカイに」向かって、「あなたがたは、ユダヤ人についてあなたがたのよいと思うように王の名で書き、王の指輪でそれに印を押しなさい。王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができない」と言いました(8:7,8)。

それでモルデカイはクセルクセス王の名で新たな命令を書きます。その内容は、「どの町にいるユダヤ人にも、自分のいのちを守るために集まって、自分たちを襲う民や州の軍隊を、子どもも女たちも含めて残らず根絶やしにし、虐殺し、滅ぼし、彼らの家財をかすめ奪うことを許した」(8:11)というものです。

先には、ペルシア帝国内のすべての民に向かって「すべてのユダヤ人を根絶やしにし…家財をかすめ奪え」(3:13)という王命が出されました。しかし今度は、それを無効にするためにユダヤ人に徹底抗戦を許したばかりか、襲いかかって来た者の家族までも根絶やしにし、家財をかすめ奪うことを許可したというのです。

つまり、ユダヤ人の自己防衛権をペルシア王が保護し、それを応援するという姿勢を見せたのです。

国際政治で熱い戦争を防ぐために「抑止力」ということばが用いられます。たとえば北朝鮮は、何度も公に韓国の政権に鉄槌を下すと脅していますが、それを実行できないのは、韓国およびその同盟国アメリカの戦力が自分たちに勝っていることを知っているからです。

軍事力を持つことの最大の意義は、攻撃を退けること以前に、敵の攻撃の意欲をなくしてしまうことです。ミサイルの最大の存在意義は、攻撃力よりも抑止力にあります。

しかもこの王命には、具体的な日付が、「このことは、クセルクセス王のすべての州において、第十二の月、すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちに言うようにということであった」と記されています(8:12)。これは、ハマングが「くじ(プル)」で決めていたユダヤ人絶滅計画の実行日に当たります。つまり、ユダヤ人にはいつでもどこでも、敵に復讐する権利が認められたのではなく、ユダヤ人絶滅計画の予定日に限って、復讐が認められたのです。

そして、「各州に法令として発布される、この文書の写しが、すべての民族に公示された。それはユダヤ人が自分たちの敵に復讐するこの日に備えるためであった」(8:13)と記されます。

この意味は、ユダヤ人がこの日に徹底的な防衛の権利を王から認められているのをすべての民が知ることによって、彼らはユダヤ人への攻撃を思いとどまることにありました。

「この法令はスサの城でも発布され」ましたが(8:14)、その後「モルデカイは青色と白色の王服を着て、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとい、王の前から出て来た。するとスサの都は喜びの声にあふれた。ユダヤ人にとって、それは光と喜び、歓喜と栄誉であった。王の命令と法令が届い

たところは、どの州、どの町でも、ユダヤ人は喜び、楽しみ、祝宴を張って、祝日とした」と描かれます(8:15-17)。

ユダヤ人はこのことを毎年覚えてプリムの祭りを祝いますが、その時期は過越の祭りの一か月前です。それはカトリック教国のカーニバルに似ています。過越の祭りには厳密なルールがありますが、この祭りは、心の奥底からの喜びを自由に表現する「光と喜び、歓喜と栄誉」の日として祝われます。

その結果が、「この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した。それはユダヤ人への恐れが彼らに下ったからである」(8:17)と記されます。自分たちの立場を公にできるとは、神の民が堂々と礼拝のために集まり、愛の交わりを自由に深めることができることを意味しました。

これ以降も、ユダヤ人は世界中で自分たちの共同体を築いてゆきますが、その原点がここに記されています。私たちも自分が神の民であることを互いに喜ぶ交わりを、この世に対して証することができます。

私たちが特別な「神の民」であることを周りの方々も評価せざるを得なくなるということ、それこそ最大の伝道になります。

当時の王権と神のご主権には似た面があります。神もすでに出されたご自身のことばを変えることはできません。神はご自身に逆らう者に「のろい」を下すと警告しておられました。また神はご自身が創造された世界を台無しにする者たちに「怒り」を発しておられます。

私たちは神の「怒り」と「のろい」を受けるのにふさわしい者でしたが、神は何とその怒りを、ご自身の御子を「宥めのささげ物」(Iヨハネ 4:10)とすることで鎮めてくださいました。イエスは私たちの身代わりに神の「のろい」をその身に引き受けられました。それによって、イエスに信頼する者は、「のろい」から「祝福」へと移されました。

イエスを主と告白する者は、もはや神の怒りとのろいを恐れる必要はありません。エステル記での大逆転はそれを示唆しています。

モルデカイはイエスのひな型でもあります。ヘブル 5 章 7 節には、「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました」と記されますが、モルデカイもハマンの策略によりユダヤ人絶滅計画が王命として出されたとき、「衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶり、大声で激しくわめき叫びながら都の真ん中に出て行った」(4:1)と記されていました。

彼は何かの具体的な計画を練ろうなどと考える前に、ひたすら泣き叫んだのです。神はそれを聞き入れて彼を総理大臣の地位に引き上げました。それは神がイエスを死から救い出してご自身の右の座に着座させたことに通じます。

私たちは人々の前で強がる必要はありません。恐れや悲しみが迫ってきたときには、人から軽蔑されるほどに泣き叫んだら良いのです。また、「憤り」が心の中に「燃え立つ」ようなときは、その気持ちを神に訴え、「神の怒りにゆだねる」ことができます。それは密室の祈りなされるべきですが、神はすべてを逆転させることができます。